

地域看護学実習における学生の健康教育の実施状況と学びの検討

古田加代子¹, 佐久間清美¹, 興水めぐみ¹, 白石 知子¹, 久米 智美¹, 秋山さちこ²

Students' Learning and Practical Status of Health Education in community Health Nursing Practice

Kayoko Furuta¹, Kiyomi Sakuma¹, Megumi Koshimizu¹,
Tomoko Shiraiishi¹, Tomomi Kume¹, Sachiko Akiyama²

キーワード：健康教育, 健康教育の実施状況, 学び, 地域看護学実習

I はじめに

地域保健に従事する保健師は、担当地区を持ち、その地域に住む住民の健康レベルの向上を目指し、健康問題解決のために活動している。そして活動にあたっては、地域住民も参加した「組織化された共同社会の努力」によって問題解決が図られることを、念頭においている。保健師の実際的な活動方法としては、家庭訪問、健康相談、健康診査、健康教育、小集団・地区組織活動などがあり、その中でも健康教育は複数の住民に同時に働きかけることができるため、地域全体で問題解決を図っていくための方法として、重要である。

現在、我が国においては、生活様式の変化や高齢化などによって引き起こされた生活習慣病を予防することが、大きな課題となっている。そこで、WHOが提唱したヘルスプロモーションの考え方に基づいた「健康日本 21」の推進や「健康増進法」制定により、個人のセルフケア能力の向上とともに、個人の健康づくりを支援する社会環境の整備を重視した活動がすすめられている。その中において健康教育は、セルフケア能力の向上と共に、地域活動の強化、ヘルスサービスの方向転換などにおいても大変有用な方法^{1)~3)}とされている。

このような必要性の中から、本学では学生の健康教育の実践力を高めることを目標に、学生の健康教育における学びの分析⁴⁾をとおして、効果的な実習方法を検討してきた。平成18年度からは、平成17年度までの参加型実

習に替えて、全学生が地域住民に対して実際に健康教育を実施する方法をとった。そこで、方法変更後における学生の健康教育の実施状況と学びを明らかにし、効果的な教育方法について検討することを目的として本研究を行った。

II 用語の定義

本研究においては、「健康教育」と「学び」を以下のように定義する。

「健康教育」：複数の住民に対して、意図的に計画された健康に関する教育活動をいう。

「学び」：学生が実習経験（説明を受ける、参加する、観察する、実施するなど）をとおして修得した事柄。

III 本学における健康教育に関する教育方法

1. 講義

本学では健康教育についての講義を、地域看護方法論 I（2年前期、2単位60時間、必修）の中で20時間程度実施している。講義では目的と対象、展開過程、健康教育に活用できる理論など基本的な事柄を学習する。その後8名程度のグループ毎に、地域保健の中で健康教育として実施される頻度が多いテーマについて、企画・指導案を立てて発表を行い、全員で検討する機会を持っている。

¹愛知県立看護大学（地域看護学）、²前愛知県立看護大学（地域看護学）

2. 実習

実習においては、健康教育を地域看護学実習（4年前期，3単位135時間，必修）の中で実施している。地域看護学実習は全15日間で，前半の市町村実習（9日間）と後半の保健所実習（5日間），学内でのまとめ（1日間）から構成されている。その中で健康教育については，市町村実習の中で一人1回10分程度実施することを課している。学生は5月初旬に各市町村で行われる現地オリエンテーションで，指導保健師から市町村の概況および保健事業について説明を受ける。その上で健康教育の対象，テーマについての提示を受ける。そして実習開始までに各自が指導案（図1，様式5-1・5-2）を立案し，実習に

入ると教員，指導保健師からの助言を得る。また実施までには教員，指導保健師，実習グループメンバーなどが参加して，リハーサルを1回以上行うこととしている。リハーサル実施後には，参加者からの助言を得て，修正を行う。このような準備を経て，学生は住民に対する健康教育を実施している。

IV 研究方法

1. 対象

1) 平成18年度地域看護学実習履修学生87名が，実習記録として作成した健康教育指導案（図1 様式5-1・

健康教育 II		様式5-2																																																																																																																																				
実習施設		学籍番号	学生氏名																																																																																																																																			
段階(時間)	項目・内容	指導上の留意点	予測される対象の反応	方法・教材																																																																																																																																		
<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th colspan="2" style="text-align: center;">健康教育 I</th> <th colspan="3" style="text-align: right;">様式5-1</th> <th colspan="2" style="text-align: center;">健康教育 III</th> <th colspan="3" style="text-align: right;">様式5-3</th> </tr> <tr> <th colspan="2" style="text-align: center;">実習施設</th> <th style="text-align: center;">学籍番号</th> <th colspan="2" style="text-align: center;">学生氏名</th> <th colspan="2" style="text-align: center;">実習施設</th> <th style="text-align: center;">学籍番号</th> <th colspan="2" style="text-align: center;">学生氏名</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td colspan="5">健康教育のテーマ</td> <td colspan="5" rowspan="2">評価</td> </tr> <tr> <td colspan="2">健康教育の目的・目標</td> <td colspan="3">開催日時 平成 年 月 日 () 午前・午後 時 分～ 時 分</td> <td colspan="5" rowspan="10"> 健康教育を実施(参加)しての学び 実習指導者助言 </td> </tr> <tr> <td colspan="2">開催場所</td> <td colspan="3">対象</td> <td colspan="5">担当者および役割</td> </tr> <tr> <td colspan="2">対象の特性</td> <td colspan="3">企画に至った経緯(テーマ選定の理由含む)</td> <td colspan="5">必要物品</td> </tr> <tr> <td colspan="2">保健事業名</td> <td colspan="3">保健事業全体の構成</td> <td colspan="5">会場設置</td> </tr> <tr> <td colspan="5">周知方法</td> <td colspan="5">参考文献</td> </tr> <tr> <td colspan="5">評価計画</td> <td colspan="5">参考文献</td> </tr> <tr> <td colspan="5">参考文献</td> <td colspan="5">参考文献</td> </tr> <tr> <td colspan="5">参考文献</td> <td colspan="5">参考文献</td> </tr> <tr> <td colspan="5">参考文献</td> <td colspan="5">参考文献</td> </tr> <tr> <td colspan="5">参考文献</td> <td colspan="5">参考文献</td> </tr> </tbody> </table>					健康教育 I		様式5-1			健康教育 III		様式5-3			実習施設		学籍番号	学生氏名		実習施設		学籍番号	学生氏名		健康教育のテーマ					評価					健康教育の目的・目標		開催日時 平成 年 月 日 () 午前・午後 時 分～ 時 分			健康教育を実施(参加)しての学び 実習指導者助言					開催場所		対象			担当者および役割					対象の特性		企画に至った経緯(テーマ選定の理由含む)			必要物品					保健事業名		保健事業全体の構成			会場設置					周知方法					参考文献					評価計画					参考文献					参考文献					参考文献					参考文献					参考文献					参考文献					参考文献					参考文献					参考文献				
健康教育 I		様式5-1			健康教育 III		様式5-3																																																																																																																															
実習施設		学籍番号	学生氏名		実習施設		学籍番号	学生氏名																																																																																																																														
健康教育のテーマ					評価																																																																																																																																	
健康教育の目的・目標		開催日時 平成 年 月 日 () 午前・午後 時 分～ 時 分								健康教育を実施(参加)しての学び 実習指導者助言																																																																																																																												
開催場所		対象			担当者および役割																																																																																																																																	
対象の特性		企画に至った経緯(テーマ選定の理由含む)			必要物品																																																																																																																																	
保健事業名		保健事業全体の構成			会場設置																																																																																																																																	
周知方法					参考文献																																																																																																																																	
評価計画					参考文献																																																																																																																																	
参考文献					参考文献																																																																																																																																	
参考文献					参考文献																																																																																																																																	
参考文献					参考文献																																																																																																																																	
参考文献					参考文献																																																																																																																																	

図1 健康教育記録用紙（様式5-1～5-3）

5-2) 87部を用いて、健康教育の実施状況を分析した。
 2) 平成18年度地域看護学実習履修学生87名のうち、各施設別クール別に無作為に抽出した1学生の健康教育指導案(図1 様式5-3)計28名分を用いて、健康教育からの学びを分析した。

2. 分析方法

1) 指導案(図1 様式5-1・5-2)の中の「保健事業全体の構成」「担当者および役割」と一連の展開案から、実施形態(個人での単独実施か、実習グループでの共同実施か)を分類した。また「テーマ」「目的・目標」「対象」「保健事業名」からは、健康教育を実施した場面とテーマを分類した。

2) 指導案(図1 様式5-3)の「評価」および「健康教育を実施しての学び」から、文脈を読みとりながら学生の学びと考えられるデータを抽出した。データは、先行研究⁴⁾で示された「健康教育からの学び」のカテゴリ分類を参考に、分類した。なお、先行研究で示されたカテゴリに分類できないデータは、意味内容の同質性、異質性を検討し、共通するものをカテゴリ化して加えた。データの抽出、カテゴリ分類は、実習を担当した3名の教員で行い、教員間で意見の一致をみるまで検討を重ねた。なお、意見の一致に至らないデータは、採用しなかった。

3. 倫理上の配慮

対象となる学生に、既に提出している実習記録を用いて分析を行うが、実習記録は個人名が特定できないようにデータを加工して使用すること、結果を公表すること、研究協力の有無が成績には全く影響を及ぼさないことなどを文書で説明し、文書で同意を得た。

V 結果

1. 健康教育の実施形態

平成18年度地域看護学実習において、履修学生87名全員が、健康教育を実施することができた。実習施設から提供された健康教育の形態を図2に示した。指導案の立案から実施、評価までの一連の過程を単独で実施した学生は46名(52.9%)であった。また複数人で与えられたテーマの指導案を立て、分担しながら共同で実施した学生は41名(47.1%)であった。

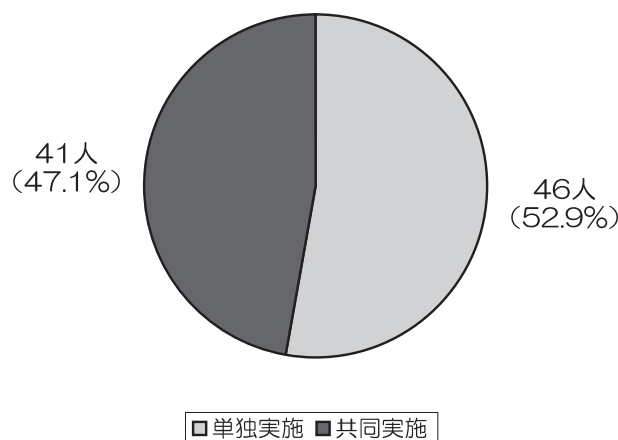


図2 学生による健康教育の実施形態 (n=87)

2. 健康教育を実施した対象、テーマおよび場面

学生の実施した健康教育のテーマを表1に示した。母子保健に関する教育を37名(42.5%)の学生が実施した。内訳を見ると「成長発達と事故防止」について実施した者が15名(17.2%)と最も多く、「成長発達と育児」6名(6.9%)、「妊娠中の過ごし方」「予防接種」が共に4名(4.6%)でこれに続いた。一方、成人・高齢者保健に関する健康教育実施学生は50名(57.5%)であった。「乳が

表1 学生が実施した健康教育の対象およびテーマ

n=87			
対象	テーマ	人数	(%)
母子			
(妊婦)	妊娠中の過ごし方	4	4.6
	母乳栄養のすすめ	3	3.4
	母子健康手帳の使い方	2	2.3
(乳幼児)	成長発達と事故防止	15	17.2
	成長発達と育児	6	6.9
	予防接種	4	4.6
	小児肥満予防	3	3.4
小 計		37	42.5
成人・高齢者			
(成人・高齢者)	乳がんの自己検診法	9	10.3
	生活習慣病予防	9	10.3
	高齢者の理解と介護予防	3	3.4
(高齢者)	転倒予防	7	8.0
	脳活性化トレーニング	7	8.0
	熱中症・脱水予防	4	4.6
	フットケア	4	4.6
	骨粗鬆症予防	3	3.4
	閉じこもり予防	2	2.3
	その他	2	2.3
小 計		50	57.5
合 計		87	100.0

んの自己検診法」「生活習慣病予防」は共に9名(10.3%)で最も多く、「転倒予防」「脳活性化トレーニング(レクリエーションを含む)」が共に7名(8.0%)でこれに次いだ。また「熱中症・脱水予防」「フットケア」「骨粗鬆症予防」「高齢者の理解と介護予防」などのテーマもあった。

健康教育の実施場面は、母子を対象とした教育では、乳幼児健診22名(25.3%)と妊婦教室9名(10.3%)でその大半を占めた。成人・高齢者を対象とした教育では、介護予防事業22名(25.3%)、乳ガン検診9名(10.3%)という機会が多かった。なお成人・高齢者を対象とした教育では、地域でボランティアとして活動する食生活改善推進委員や保健推進委員の研修会において、健康教育を担当した学生6名(6.9%)もあった。

3. 健康教育からの学び

健康教育からの学びは、新たに抽出されたカテゴリを加え、表2のようにまとめられた。以下、分類の参考にした先行研究¹⁾と同じく、大カテゴリ【 】, 中カテゴリ《 》, 小カテゴリ〈 〉, データ「 」で示す。

1) 新たに抽出されたカテゴリ

今回の分析により、2つの中カテゴリと、17の小カテゴリが抽出された。

【企画】においては、《計画時の留意点》が抽出され、〈目的・目標を明らかにする〉〈伝える内容を絞る〉〈伝える内容の構成を考える〉〈会場設営を考える〉〈時間に計画性をもった取り組み〉〈メンバー間で計画を共有する〉が見出された。

【セルフケア能力・保健行動動機づけの技術】では《伝える》が抽出された。これには〈実施者の立ち位置〉〈実施者の立振舞〉〈視線を対象者と合わせる〉〈言葉を選んで使う〉〈わかりやすい話し方〉〈実技を取り入れる〉といった対象者に内容を伝えるための具体的な方法についての学びが表現されていた。さらに《相互作用・コミュニケーション形態を用いる》では、〈集団の中でも個人個人の理解度に目を向ける〉が見出された。

【評価】では《総合的な評価》の中に〈対費用効果を考える必要性〉〈長期的な評価の必要性〉が、《今回の評価方法》の中に〈アンケート結果から行う〉が見出された。

【実施による発見】の《気づき》として、〈メンバーとのディスカッションの効果〉〈実施までのプロセスを踏むことの必要性〉が述べられていた。

2) カテゴリ分類による健康教育実施における学生の学びの傾向

健康教育実施における学生の学びの傾向を表2に示した。学びの傾向はカテゴリ毎にその内容を表現していた学生の実人数で表した。

【企画】段階では《プロセス》について学んだ学生はいなかったが、《企画への関心》を示した者は1名(3.6%)いた。《計画時の留意点》は16人(57.1%)が学びを得ており、その内訳は〈伝える内容を絞る〉10名(35.7%)が最も多く、〈伝える内容の構成を考える〉4名(14.3%)、〈目的・目標を明らかにする〉〈会場設営を考える〉が共に3名(10.7%)であった。〈時間に計画性をもった取り組み〉や〈メンバー間で計画を共有する〉必要性を学んだ学生はそれぞれ2名(7.1%)いた。

【対象や地域の特徴に合わせた工夫】では《対象をとらえる必要性》を24名(85.7%)が学んでいた。中でも〈対象をとらえると効果的な教育技術を用いることができる〉は22名(78.6%)で8割近くの学生が記述していた。〈地域をとらえると教育効果があがる〉ことを学んだ者は3名(10.7%)であった。【対象や地域の特徴に合わせた工夫】の《難しさ》は6名(21.4%)から抽出され、〈様々な想定をしておく必要があるが難しい〉は3名(10.7%)、〈対象の特性をとらえる難しさ〉は4名(14.3%)であった。《対象の意見を取り入れる》は2名(7.1%)が表現していた。

【セルフケア能力・保健行動の動機づけの技術】で《媒体を用いる》ことについて学びを得ていた者は19名(67.9%)であった。媒体の掲示場所、住民からの角度など〈視覚的な工夫をして使用〉することに気づいた者は15名(53.6%)と最も多く、〈媒体を選定〉する6名(21.4%)、〈視覚的な工夫をして作成〉5名(17.9%)と続いていた。《伝える》ことについては14名(50.0%)が記述していた。明瞭な発音など〈わかりやすい話し方〉は9名(32.1%)、〈言葉を選んで使う〉は5名(17.9%)、〈実技を取り入れる〉は4名(14.3%)が学んでいた。《共感的な言葉をかける》は3名(10.7%)から抽出された。《相互作用・コミュニケーション形態を用いる》は26名(92.9%)が記述していた。〈一方的でないことは教育に効果的〉であることや〈言葉をかけることで対象の反応を知ることができる〉ことをそれぞれ約半数(13名(46.4%)、15名(53.6%))の学生が学んでいた。また〈集団の中でも個人個人の理解度に目を向ける〉必要性を学んだ学生も8名(28.6%)と約3割にのぼった。《グ

表2 健康教育からの学びに関する記述のカテゴリ分類結果

n=28

大カテゴリ	中カテゴリ	小カテゴリ	小カテゴリ毎の実人数(%)		中カテゴリ毎の実人数(%)	
企 画	プロセス	プロセスの考え方	0	0.0	0	0.0
		経緯に関心を持つ	1	3.6		
	企画への関心	周知方法について考える	0	0.0	1	3.6
		教育日程の工夫に気づく	0	0.0		
		目的・目標を明らかにする	3	10.7		
		伝える内容を絞る	10	35.7		
	計画時の留意点	伝える内容の構成を考える	4	14.3		
		会場設営を考える	3	10.7	16	57.1
		時間に計画性をもった取り組み	2	7.1		
		メンバー間で計画を共有する	2	7.1		
地域をとらえると教育効果上がる		3	10.7			
対象をとらえると効果的な教育技術を用いることができる		22	78.6	24	85.7	
対象や地域 の特徴にあわせ た工夫	対象をとらえる必要性	対象を考慮すると特性にあった時間設定ができる	2	7.1		
		様々な想定をしておく必要があるが難しい	3	10.7	6	21.4
	難しさ	対象の特性をとらえる難しさ	4	14.3		
		対象の意見を取り入れる	2	7.1	2	7.1
セルフケア能 力・保健行動 の動機づけの技術	媒体を用いる	対象にあわせて作成	3	10.7		
		視覚的な工夫をして作成	5	17.9		
		媒体を選定	6	21.4	19	67.9
		視覚的な工夫をして使用	15	53.6		
	伝える	実施者の立ち位置	2	7.1		
		実施者の立振舞	2	7.1		
		視線を対象者と合わせる	1	3.6		
		言葉を選んで使う	5	17.9	14	50.0
		わかりやすい話し方	9	32.1		
	共感的な言葉をかける	実技を取り入れる	4	14.3		
		共感的な言葉かけは大切である	2	7.1		
	相互作用・コミュニケーション 形態を用いる	共感的な言葉かけることは、行動変容・セルフケア能力につながる	1	3.6	3	10.7
		一方的でなく相手に受け入れてもらう	4	14.3		
		一方的でないことは教育に効果的	13	46.4		
		相互作用を感じる	3	10.7	26	92.9
	グループダイナミクスの効果 を活用する	言葉をかけることで対象の反応を知ることができる	15	53.6		
集団の中でも個人個人の理解度に目を向ける		8	28.6			
雰囲気づくりの大切さ		3	10.7			
交流がもてるよう配慮する		0	0.0	7	25.0	
日常生活を振り返ってもらい、 問題を表面化する技術を用い る	グループダイナミクスの効果を感じる	3	10.7			
	グループダイナミクスは効果が高まる	3	10.7			
	日常生活を振り返る機会をもつ	4	14.3			
主体的な取り組みを促す	表面化する方法	7	25.0	13	46.4	
	生活者の立場にたつ姿勢	3	10.7			
	自分で生活に取り入れる	4	14.3			
	対象が自主的に実施できるようにする	4	14.3	9	32.1	
継続できるように働きかける	対象が健康課題に着目し、取り入れることできるようにする	4	14.3			
	効果を実感する働きかけ方法	5	17.9			
	行動変容は難しい	1	3.6	6	21.4	
家族・地域に広める	生活に取り入れることは容易ではない	1	3.6			
	個から地域へ広める	2	7.1			
	地域の力を活かす	0	0.0	4	14.3	
	家族を巻き込む	2	7.1			
評 価	総合的な評価	参加者以外へもアプローチしていく	0	0.0		
		評価は対象の反応だけではない	3	10.7		
		対費用効果を考える必要性	1	3.6	5	17.9
		長期的な評価の必要性	3	10.7		
	今回の評価方法	健康教育の評価は難しい	1	3.6		
		対象の意見から行う	15	53.6		
地区活動の中 での位置づけ	他事業との関連	対象の反応から行う	20	71.4	26	92.9
		アンケート結果から行う	3	10.7		
		他事業と関連づけて支援する	8	28.6	8	28.6
実施による 発見	責任感	住民に働きかける機会にする	0	0.0		
		教育を実施する責任感を抱く	4	14.3	4	14.3
	達成感	達成感を抱く	2	7.1	2	7.1
		基礎知識不足	5	17.9		
		技術鍛錬の必要性	13	46.4		
		技術不足	5	17.9	17	60.7
		メンバーとのディスカッションの効果	1	3.6		
気づき	実施までのプロセスを踏むことの必要性	2	7.1			

ループダイナミクスの効果を活用する》ことを学んだ者は7名(25.0%)であった。《日常生活を振り返ってもらい、問題を表面化する技術を用いる》は13名(46.4%)が記述していた。身近な内容で問題を〈表面化する方法〉についての記述が7名(25.0%)で最も多かった。《主体的な取り組みを促す》ことは9名(32.1%)から抽出された。〈自分で生活に取り入れる〉方法を伝えることや、〈対象が自主的に実施できるようにする〉働きかけ、さらには〈対象が健康課題に着目し、取り入れることができるようにする〉ことを、それぞれ4名(14.3%)が学んでいた。《継続できるように働きかける》ことを学んだ学生は6名(21.4%)であった。中でも記録用紙を用いて実践の記録をすすめるなど〈効果を実感する働きかけ方法〉が有効であることを記述した者が5名(17.9%)いた。《家族・地域に広める》は4名(14.3%)の記述であった。

【評価】においては《総合的な評価》について学んでいた者は5名(17.9%)おり、〈評価は対象の反応だけではない〉ことや、〈長期的な評価の必要性〉に気づいていた。《今回の評価方法》については26名(92.9%)と、ほぼ全員が記述しており、その内訳は〈対象の意見から行う〉15名(53.6%)、〈対象の反応から行う〉20名(71.4%)、〈アンケート結果から行う〉3名(10.7%)であった。

【地区活動の中での位置づけ】については、《他事業との関連》で支援することを学んだ者が8名(28.6%)いた。

【実施による発見】では何らかの《気づき》を得た者が、17人(60.7%)にのぼった。学生は〈技術鍛錬の必要性〉を13名(46.4%)が、〈技術不足〉〈基礎知識不足〉についてもそれぞれ5名(17.9%)が記述していた。一方で《責任感》や《達成感》を抱いた者は1割程度であった。

VI 考察

1. 健康教育の実施状況について

実施形態としては単独実施の学生と共同実施の学生がほぼ半分ずつであった。妊婦教室や乳幼児健診の際に母子を対象に健康教育を行った者が約4割で、乳幼児の成長発達に関連した育児の仕方などをテーマにしていた。一方、成人・高齢者を対象とした者は約6割で、検診や介護予防事業の中で健康教育を行っていた。生活習慣病予防などのテーマに加え、高齢者のみに教育する場合は、介護予防に関する様々なテーマで実施されていた。

学生が実習中に行う健康教育の機会、指導保健師によって選択され、学生に提示される。学生の実習期間中に行う健康教育の実施はその8割ほどを共同実施で行ったという報告⁵⁾もあるが、今回は単独実施者が多かった。一人10分間を実施時間の目安としたこと、事前の教員と指導保健師の打合せなどで教育趣旨を伝えたことにより、指導保健師によって機会を工面するなどの配慮があったことが考えられる。今回、母子、成人・高齢者などの一般住民を対象として選択されたのは、市町村での教育実施機会が多いこと、学生が対象や内容をイメージしやすく取りかかりやすいという教育効果が考慮されてのことと推測できる。対象やテーマについての傾向は、初めて住民を対象に健康教育を行う学生にとっては妥当であったと考えられる。

2. 健康教育実施における学生の学びの傾向と今後の課題

学生の学びは実施過程にそって、企画、実施、終了後に分けることができた。中カテゴリで半数程度の学生が学びを記述していたのは、企画段階では《計画時の留意点》と《対象をとらえることの必要性》であった。実施段階の【セルフケア能力・保健行動動機付けの技術】の中では、《媒体を用いる》《伝える》《相互作用・コミュニケーション形態を用いる》《日常生活を振り返ってもらい、問題を表面化する技術を用いる》であった。また終了後は《今回の評価方法》と実施による《気づき》であった。学生の学びは教育の実施の中に多く見られ、どのように自分が伝えたいことを伝えるかという方法に意識が向いていたことがわかる。これは堀川ら⁶⁾の実習で健康教育を実施した後に多くの学生がプレゼンテーションの方法に関する意識・気づきをもっていたという結果と同様であった。

実習における健康教育は、学生が指導保健師、教員から指導案についての助言を得て、最低1回以上のリハーサルを行い、住民に対して実施している。指導保健師からテーマを提示されてから実施までの間、何度も対象に合わせた内容と展開、指導方法の吟味をしても、そのこと以上に「できあがった指導案の内容をいかに適確に伝えるかということに関心が向いた」と考えられる。また初めての経験で、伝えることに精一杯である姿も浮かび上がってきた。しかしその中で「計画時には対象をとらえ、伝えたい内容をしぼり、媒体を活用して、わかりやすく伝える。そして実施後には評価を行う。」とい

う最も基本的なことは理解されていたことが伺える。また健康教育のパラダイム変化⁷⁾の中で、保健師からの一方通行的な関係ではなく双方向の関わりにより、住民自身が主体的な学習者となることが重視されているが、そのことについても学生は多くを学んでいたと言える。平澤⁸⁾の報告によると、学生の卒業時に習得すべき健康教育の実践能力について、大学側の約7割、地域側の約6割が「指導下でできる」ことを目標に上げている。今回の経験をとおし、学生は技術鍛錬の必要性を痛感しているが、指導を受けながら自ら実践できる基礎的な技術の習得はできたと考えられる。本実習は、実践能力を高めるための有効な機会であったといえる。

健康教育は保健師の活動方法のひとつであり、本来は地域のヘルスニーズに対応して行われ、個人のみならず地域全体が変化することを目指すものである。従って、今回は指導保健師から事前にテーマを提示してもらったために学生の学びが薄かったと考えられる《企画への関心》や、教育した内容を《家族・地域に広める》こと、《他事業との関連》で支援することなどは、健康教育実施後のカンファレンスなどを通じて学生の学びにしていける必要がある。また松下⁹⁾は、健康教育を担う保健師の専門職としての基本的な課題は、住民の健康づくりに関する主体形成を可能にする基本的な能力を身につけるための、学習のあり方とその過程を明らかにして、支援のあり方を考えるところにあると述べている。つまり、的確に保健師側のメッセージを伝えることではなく、住民が主体的に健康づくりを実践する能力を身につけることができるように、学習を組み立て、方法を考えることが保健師の専門性であると提言している。今回、学生の学びの薄かった《グループダイナミクスの効果を活用する》ことで学習の効果をあげ、《主体的な取り組みを促す》ことや《継続できるように働きかける》ことを内容・方法から考えていくことが保健師本来の役割とも言える。学内の講義の中で、指導案の作成からプレゼンテーションまでの経験を積むなどして、実習では保健師本来の役割により関心が向けられるようにしていく必要がある。また、保健師の健康教育を見学し、住民に対する働きかけの意図を検討することなども効果的であると考えられる。講義と実習を連動させる中で方法を模索することが、課題として明らかになった。

VII まとめ

平成18年度地域看護学実習履修学生87名が、実習記録として作成した健康教育指導案を用いて、健康教育の実施状況と学びを分析した結果、学生全員が健康教育を実施し、その対象は母子、成人・高齢者であることが明らかになった。またテーマは、学生がその内容をイメージしやすいものが選択されていた。さらに学生の学びからは、指導案の内容をいかに適確に伝えるかということに関心が向く傾向があったが、計画から評価までの健康教育の一連の過程と基本的な事柄は学習したことが伺えた。また学生の学びが少なかった内容からは、保健師本来の役割である住民の主体性を促すための支援を学ぶために、講義内容や実習方法を工夫する必要性が示唆された。

謝辞

ご多忙な業務の中、熱心に実習指導をしてくださいました指導保健師の皆様と、研究に快くご協力くださいました学生の皆様に感謝致します。

文献

- 1) 高村寿子, 福島道子: 保健婦が行うヘルスプロモーション—その新戦略の活かし方をめぐって—. 生活教育, 43(5): 7-11, 1999.
- 2) 江口篤寿: 健康教育における国際的動向. 保健の科学, 42(7): 514-519, 2000.
- 3) 中村正知: 日常生活習慣と健康教育. 保健の科学, 42(7): 530-535, 2000.
- 4) 秋山さちこ, 奥水めぐみ, 佐久間清美, 古田加代子, 白石知子, 久米智美: 公衆衛生看護学実習における健康教育の学び. 愛知県立看護大学紀要, 11: 33-39, 2005.
- 5) 角田あゆみ, 奥山則子, 杉本正子, 安田美弥子: 保健婦学生の健康教育実践の分析—保健所実習体験より—. 東京都立医療技術短期大学紀要, 9: 237-250, 1996.
- 6) 堀川淳子, 真嶋由貴恵, 石原逸子: 「健康教育」の実施能力を育成する教育方法の課題—産業看護実習における集団健康教育実施後の学生の意識と気づきの分析より—. 産業医科大学雑誌, 25(3): 341-349, 2003.
- 7) 中村裕美子: 健康教育の展開. 中村裕美子他(著) 標準保健師講座 2 地域看護技術. pp. 110-111, 医学

書院, 2005.

8) 平澤敏子: 保健師学生の実習指導に関するあり方調査研究事業報告書. 8-24, 2005.

9) 松下 拡: 健康教育. 村嶋幸代 (編) 最新保健学講座 3 地域看護支援技術. pp. 160-161, メヂカルフレンド社, 2006.